

第1章

概

要

本報告書は、平成10年度の自己評価委員会の活動をまとめたものである。

今年度の活動の柱は、大きく三つに分けることができる。その第一は、自己評価委員会がこれまで行ってきた活動の点検と前年度からの引継事項の処理、第二は、外部評価の実態に関する調査、第三は、昨年度に試行した「学生による授業アンケート」の正式全学実施である。

第一の柱については、大学院改革と、大学の管理運営体制の改革が、前年度からの引継事項であったため、管理運営に関する報告を第2章に掲載した。大学院改革は目下進行中である。

また、本委員会の発足時において、「5年毎に委員会の活動を見直す」との方針が決められており、今年度は発足から5年を経過した時期であるところから、この点も検討された。

その結果、点検項目は一応全体をカバーしたので、既に点検を行った事項につき、その後、大きな変化や問題点が顕在化したものについて優先的に再検討を行うことが合意された。さらに、これまでの点検・評価において改善の必要性が指摘されたものが、現実に改善されているかどうかの検証を行うべきものとの結論を得た。これらの点に関する具体的な作業は今後の課題として引き継がれる。

第二の柱である「外部評価」については、本委員会は今年度の活動の範囲を、実態調査のための情報収集と、全教官に対する情報提供に限定した。その報告が第3章に掲載されている。

第三の柱である「学生による授業アンケート」は、三つの柱の中で最も多くの時間を要したものである。一昨年、多くの教官から、アンケート実施に対する疑念が提起されたことから、本委員会は、このアンケートが授業改善という目的以外に使用されないための原則と方法を検討し、全学の理解を得るための作業を重ねた。幸い大きな困難もなく正式実施ができたことは、昨年の試行経験によるところが大きい。前委員会の努力に感謝する次第である。

アンケートの方式は昨年度の形式を踏襲し、質問内容によって、全学の教育体制に関する「共通型」と、個々の授業に関する「個別型」に区分して実施した。前者の結果が本報告書第4章に、後者の結果が第5章に掲載されている。

なお、今年度の委員会において、報告書の執筆者を明記すべきことが決定されたので、文末に記す。

最後に、アンケート回答の電算処理・分析・執筆をめぐって多大の調整作業を要したことを反省点として挙げておきたい。これが、本報告書の刊行が大幅に遅れた理由である。関係各位にお詫び申し上げるとともに、今後の課題として、個人的な善意と負担に寄り掛かることのない作業体制の必要性が痛感されるところである。

執筆者 第1章・第3章・第4章：結 城 洋一郎（自己評価委員会委員長）
第2章：山 田 家 正（学 長）
第5章：西 山 茂（自己評価委員会委員）

（付記） 山田学長には多忙のなか報告の一部を執筆をいただいた、また、特に一部の委員には、時に煩雑な作業を伴う仕事をお願いすることになった。この場を借りて感謝申し上げたい。更に、本報告書を作成するにあたっては、多くの関係職員から多大なバックアップをいただいた。これらの支援がなければ、本報告書を完成することは不可能であったと思われる。ここに記して本委員会の感謝の言葉とする。